

卷頭言

雑誌づくり20年

日生病院副院長 北 嶋 省 吾

—5番街に陽がさしているころ、マイクルはフランススの腕をしっかりとかかえながら、ワシントン・スクエアのほうへ歩いていった。足どりは軽く、微笑がこぼれてきそうだった。……「よそ見しちゃだめよ」8丁目を横切るとき、フランススが言った。—

これは「夏服を着た女たち」と題するアーウィン・ショウ（常盤新平訳）1930年代の作品の冒頭である。

夏のニューヨークはかなり暑い。ショウによるとこの時期、若い女性はいっせいに夏服に着替えると言う。その姿態は魅力的らしい。マイクルがついみとれてしまうのもむりがない。それをフランススがジェラシイする。2人の軽妙な会話によるストーリーはサマードレスの女たちをめぐる展開してゆく。

病院の図書室はとともニューヨーク5番街ほど華麗ではないが、毎月新しい雑誌が届けられるのがうれしい。書架にならべられる冊子は私にとって、まさに夏服を着た女性達に匹敵する。

雑誌づくりをはじめて20年。最近では編集の責任を担うようになり、到着する新刊雑誌は手にとってみている。もっと読みやすく、親しみやすい病院の雑誌をつくりたい。そんな気持が私の心をかきたてるのかもしれない。

私達の病院に医学雑誌をつくらうと企画されたのは昭和47年1月であった。当時は今は亡き諏訪信吾院長が就任してまもない頃で意欲的な背景があった。直ちに雑誌づくりの委員会がもたれ、やがて発刊準備に大童となった。私達は既刊の病院医学雑誌はもちろん、学会雑誌、商業総合雑誌、

そして名のある欧米医学雑誌を手にして、連日夜おそくまで委員が意見を述べあった。そのとき苦心してつくりあげた雑誌構成のスタイルは、現在も基本的には変わることなく脈々として受けつがれている。

掲載内容は、綜説、原著論文、症例報告、パラメディカルによる知見、剖検記録、医局研究会での抄録、学会及び雑誌発表の記録が主なものである。雑誌の顔である表紙のレイアウトは20年を経た今日でもまったく同じである。白地にウルトラマリンで打ち出された「日生病院医学雑誌」の印字はあざやかで私達の誇りとなっている。

ところで1巻1号が発刊されたのは、企画されてから1年後の昭和48年2月であった。完成して業者により運びこまれてきたインクの香りのする雑誌が図書室にうずたかく積み上げられたその時、編集委員は期せずして歓声をあげたものだった。

巻頭に院長のものと共に、当時、日本生命済生会の顧問であられた故沖中重雄先生の祝辞が掲載されたのもよき思い出のひとつである。

このようにして自分達の手によって出来た冊子が全国の主要病院に発送された。この事により投稿者をはじめとして関係者の自覚が高まり、次の号への意欲が予想以上に湧きあがったのであった。

実のところ病院が発行する雑誌をつくっても、はたして限られた数の医師達が跡切れることなく論文を投稿してくれるかどうか……が心配の種でもあった。因みに1巻の投稿数は13編であった。そこで各編集委員がプレカーサー（前駆体）の役目よろしく、原稿書きに精を出した。幸運にも2巻は21編、次いで3巻は19編とどうやら定期的な発刊のパターンが定着化してきた。

次の目標は論文内容の充実であった。病院の医学雑誌は他の学会雑誌や商業医学雑誌とは異なる。

そのひとつは病院の臨床活動に伴う研究報告が主体となる点ではないだろうか。内科外科をはじめ各科専門領域の論文であるため、広汎な分野での最新の知識が論文の校閲に要求される。各委員は責任を感じて交代して目をとおした。殊に私達は最初より英文抄録を掲載したので気苦労が多かった。しかしこれも慣れるに従い定着化してきた。

最近では症例報告や、ひとつの手術に関する統計報告、新しい医療技術導入による臨床研究報告などが多くなってきた。此等の内容は病院の雑誌としては誠に当をえたものではないだろうか。

なお、2,3年前より医局研究会で招聘した大学関係者による教育的な講演はつとめて掲載することになっている。

もうひとつ。研修病院では大学医局からローテイトされて勤務につく若い医師がいる。彼等にとってはこの雑誌が論文づくりの恰好の場となるのではないだろうか。ベテラン医師にとっても同様である。投稿して約6カ月以内で掲載される。このような機会を手にすることができることは私達にとってなによりもうれしいことである。

私達の雑誌は昭和56年より年2回刊行することになった。2回の編集作業はかなりきつい。ことに編集に従事する委員にとっては負担が大である。しかし投稿者には2回のうちどちらかに目標をきめればよいので都合がよい。いずれにしても平均23編の原稿が恒常的に集まるようになった。この状況は病院の医療活動に対して、医療水準を高め、積極的にかつ研究的な姿勢を産み出した。

次に雑誌づくりと図書室の仕事の関係について述べる。編集委員会の構成には最初から図書委員会のメンバーが1ないし2名参加していた。殊に図書室管理の職員には雑誌づくりに直接関与してもらっている。なんとと言っても私達の編集委員会は名ばかりで、最初は全く素人の集団であった。従って字句の校正、論文内容云々といった討議はできても、文字の大きさ、字数、紙質、図表や写真の大きさ、レイアウト等については皆目わからなかった。そこで私は商業医学雑誌を発刊してい

る会社を訪れて、そのノウハウを教えてもらったりもした。少しづつ知識をたかめ、経験をつんできた。さいわい当院には有力な専従の編集委員がいて業者との交渉をしてもらっている。雑誌づくりにはこのように習熟したベテランが是非必要ではないだろうか。

そのうえ原稿づくりには文献検索が必要不可欠なことは論をまたない。締切りが近づくと図書室の机はいつも誰かが席を占めている。そして文献をさがしている。図書室がにわかにならざるを得ない。このような状況が結局医員の研究的態度を動機づけして医療水準の向上につながるのではないだろうか。

しかしながら何事をするにも経済面は無視できない。病院経営困難の時期に収益に直結しない雑誌づくりに予算をふりむけることは大変勇気がいる。幸いにも当院では理解ある経営者層の英断によって雑誌づくりをはじめ20年になった。

考えてみると、病院の歴史は臨床活動の歴史でもある。それはとりもなおさず医療活動をする医師の経験の積み重ねそのものではないだろうか。それを放置すると、やがてカルテは処分され消えていってしまう。なんとも淋しい限りである。その時、雑誌をつくっておけば歴史として残るにちがいない。後になってそれを再び手にし、将来にむかって必ずよき結果がやってくるのではないだろうか。

ふりかえてみると、雑誌を発行するようになって医師達の連帯感と積極的にしてかつ研究的な態度が目に見えてきた。その意味でも雑誌への投資はめぐりめぐって病院にとり大変よい影響を与えつつあるといえる。

これからさき病院が活動を続けるかぎり、私達の医学雑誌も継続発行してゆきたいものである。そして内容、体裁とも魅力と特色のある新鮮な姿を造り出してゆきたい。

病院の図書室に新着の冊子がならぶ。そのなかに私達の手づくりによる日生病院医学雑誌も絶えることなくならべてゆきたい。アーウィン・ショウが描いたあの素敵な夏服を着た女性のような……雑誌を夢に描いている。(1992.9)